

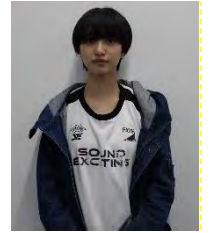
住む、通る、顔見知る

ー あふれ出しを利用した目線から始まる地域コミュニティ ー

Keywords

地域コミュニティ 路地 あふれ出し
植木鉢 単独世帯 動線

DZ21191 山本祐子



1. はじめに

幼少期を過ごした海外では、街をあげてのイベントや日常生活のあいさつ、会話など老若男女の付き合いがあった。さらに異国の地に身を置く日本人は互いに協力をして生活していた。しかし、今日の日本、特に都心部では隣人の存在を認識しながらも、挨拶すらハードルが高く感じる。そんな首都圏に置けるコミュニティの脆弱性形成に危機感を覚えている。

2. 研究背景と目的

2.1 研究背景

現代社会は都市化が進み、遊び場や集いの場が減少し、地域コミュニティが希薄化している。その結果、防災意識の低下や治安悪化、個人や家庭では解決が難しい問題が深刻化しています。多様な価値観と高まるプライバシー意識の中で、再び地域社会が連携し合う意識を育むことが求められているのではないだろうか。

2.2 研究目的

親子世帯は子供を媒介とするため地域に馴染みやすい。一方で、子供のいない単身世帯や夫婦世帯は地域コミュニティに参入するきっかけが少ない。本研究では、現在増加傾向にある単身世帯や夫婦世帯を中心にコミュニティに参加するきっかけを創出する（図1）。

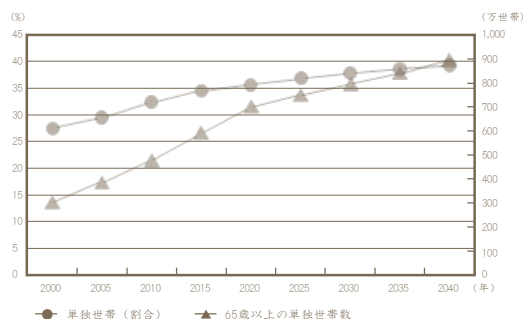


図1: 単独世帯率の推移と65歳以上の単独世帯数の推移
（総務省の『平成30年版 情報通信白書』より作成）

3. 調査内容

3.1 住戸宅形式と地域コミュニティ

本調査では木造密集地域である富士見台、大和町、京島と、集合住宅である光が丘パークタウン、高島平団地、坂出入口土地の合計6つの住宅地の地域コミュニティを

分析した。

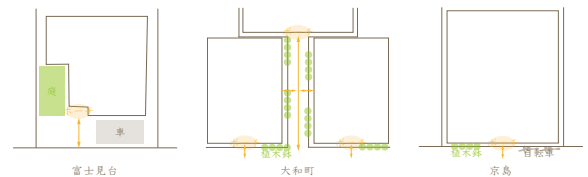


図2: 木造密集地域住戸調査結果

図2のように木造密集地域にも住宅の形式に違いがある。富士見台のように道路と住戸の間に距離があると、生活が街になじまなくなる。一方で京島のように道路と住戸の距離が近いと、あふれ出しや表出により住戸と地域にコミュニティが生まれることが分かった。



図3: 集合住宅調査結果

集合住宅は低層住宅に比べてあふれ出しが見えづらく、地域コミュニティが生まれにくい。しかし、坂出入口土地のように住民が長期間共に過ごすことでルールができ、住民同士の関わりが増える。また、他の集合住宅では、公園や植え込みの整備など住民が協力して作業することで、コミュニティが形成されていた。（図3）。

3.2 あふれ出しと表出

住宅形式と地域コミュニティの調査から、あふれ出しの有無やあふれ出しと地域の距離感が、住人と地域のコミュニティ創出に関係していると仮定した。調査により、あふれ出しや表出は私的領域を主張して、発生するのではなく、周囲の目線を意識することによりあふれ出しや表出が発生、増加し、それにより私的領域の意識が芽生えると考えた。

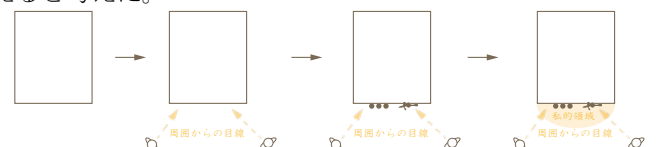


図4: あふれ出しの発生の仕方

4. 敷地

4.1 敷地現状

選定敷地は東京都江戸川区清新町の都営清新町1丁目アパートと隣接する清新町北緑地で、敷地東側の団地に住む親子世帯を中心に地域住民同士の関わりが見られる。さらに、地域には多くの外国人も暮らしている。また、このエリアはサイクリングロードや都道308号線、清砂大橋など多様な交通網に囲まれており、利便性が高い。



図5：東京都江戸川区清新町

4.2 現状の課題点

この地域の課題は、地域コミュニティ活動が子供を中心とした親子世帯を主に対象としていることである。居住者の約4割を占める単身世帯、夫婦世帯、外国人は地域との関わりが少なく、コミュニティ形成の機会が不足している。また、敷地周辺は中学校以外に人が集まる場所がなく、中学生以外は留まらないため、地域のつながりが生まれにくい状況となっている。さらに、都営住宅は設備の老朽化や騒音、ゴミ出し問題、外国人住民との摩擦などの課題を抱えており、住民が地域に溶け込みづらい状況も問題となっている。都営住宅は環境改善とともに、住民が地域社会に溶け込むための仕組みづくりが求められている。これらの地域の課題と、都営住宅の課題の二面に対し、解決策を投じる。

5. 計画

5.1 コンセプト

問題があるから関わらない、理由が無いから関わらない、言語の差があるから関わらない。関わることを億劫に感じる住民は単に広場やコミュニティ施設を作るだけでは、住民が積極的に地域コミュニティに参加することは難しい。そのため、敷地内に動線を設け、留まることのできる場を作り、人々が顔を合わせる機会を創出する。これにより、地域に馴染みきれていない人々がつながる「目線から始まる地域コミュニティ」を形成することを目指す。

5.2 手段

5.2.1 敷地を通る

集合住宅は、住戸前のスペースが外部から見えにくく、住民と外部が分断される設計が一般的である。そこで本設計では、敷地内に外部者が通行できる動線を導入し、住戸前の空間に視線が通りやすくなるよう工夫することで、あふれ出しを発生させ、従来の閉鎖的な空間を活性化させることを目指す。

5.2.2 立体路地とグリーンスケール

あふれ出しは地域コミュニティを創出する効果的な方法だが、平面的な路地では視線が通りにくい。そこで、路地を立体的に再構築し、視線が通る空間を設計。さらに、異なるスケールの緑を配置して、視線や行動を誘導し、あふれ出しを促進する。

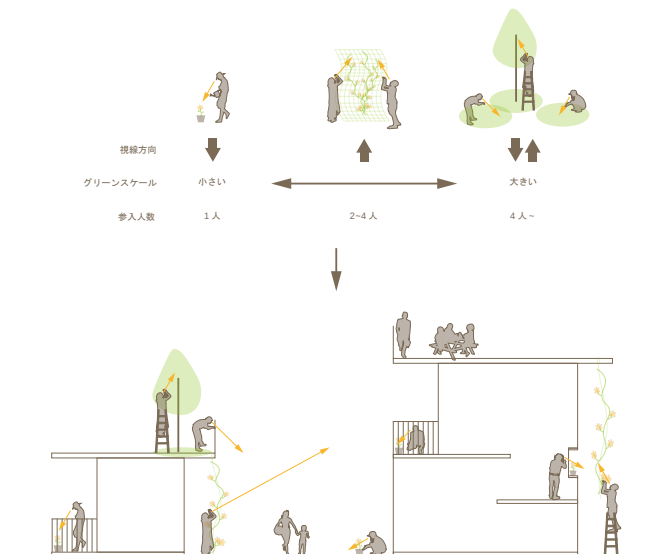


図6：グリーンスケール

6.1 参考文献

- 1) <https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h30/html/nd141110.html>
- 2) 「開放的路地空間での領域化としてのあふれ出し：路地空間へのあふれ出し調査からみた計画概念の仮説と検証 その1」 青木義次, 湯浅 義晴
(https://www.jstage.jst.go.jp/article/aijax/449/0/449_KJ00004077322/_article/-char/ja/)
- 3) 「あふれ出しにみる共用空間に広がる住民間相互作用」 久保田愛, 本間健太郎, 今井公太郎
(https://www.jstage.jst.go.jp/article/aija/84/758/84_819/_pdf)
- 4) 「路地空間における住居内部での生活様態と領域意識の現われとしての溢れ出し」 佐多祐一, 中井祐 (<http://keikan.t.u-tokyo.ac.jp/documents/research/sata.pdf>)
- 5) 「都市型低層集合住宅における共有領域の経年変化」 藤谷英孝, 丁 志 映 , 小林 秀 樹
(https://www.jstage.jst.go.jp/article/aija/77/672/77_672_283/_article/-char/ja/)



住む、通る、顔見知る

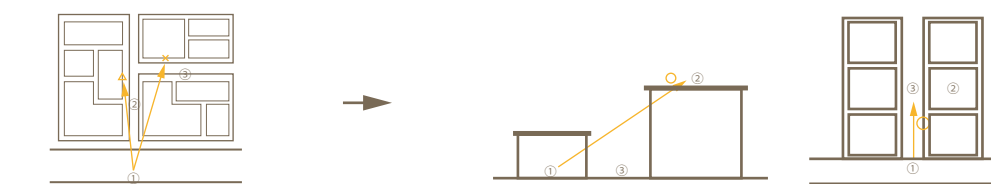
ーあふれ出しを利用した目線から始まる地域コミュニティー

問題があるから関わらない、理由が無いから関わらない、言語の差があるから関わらない。関わることを億劫に感じる住民は単に広場やコミュニティ施設を作るだけでは、住民が積極的に地域コミュニティに参入することは難しい。そのため、敷地内に動線を設け、留まることのできる場を作り、人々が顔を合わせる機会を創出する。これにより、地域に馴染みきれていない人々がつながる「目線から始まる地域コミュニティ」を形成することを目指す。

ー動線計画ー



ー住戸配置ー



1 階平面図兼配置図

